ISSN 0912-5531

とやま民俗

No. 104
令和8年2月

目次

都会の民俗学―池田彌三郎の場合― ……友尾　豊… 1
富山県南砺市旧福光町の「めでた」（二）
―その独自性を育んだ要因について― ……島田　章代… 4
「明治のネブタ流し行事」
―『北游日録』・『風俗畫報』に見る― ……白岩　初志… 12
『小矢部川上流域の人々と暮らし』を著して……加藤　享子… 16
民俗の窓 …… 20

都会の民俗学
―池田彌三郎の場合―

友尾（ともお）　豊（ゆたか）

この話の題名「都会の民俗学」は、柳田国男の民俗学が「田舎の民俗学」であることに対する語です。また、一九七〇年頃から八〇年代にかけてさかんに論ぜられた「都市民俗学」という語との混同をさけるためでもあります。

柳田国男は一八七五年（明治八）飾磨県神東群辻川村（現兵庫県神崎郡福崎町辻川）に生れました。池田弥三郎は一九一四年（大正三）東京市京橋区（現東京都中央区）銀座四丁目で生まれています。個人の生れや育ちが人のその後の人生を規定するというものではないでしょうが、こと民俗学研究に関しては無縁とは言えないでしょう。

池田弥三郎『日本の幽霊』（昭和三四・六・二五　中央公論社）は、東京の下町銀座で生まれ育った筆者の聞き書きの記録で始まる。

芸者屋の女あるじの妹分の女で姉さんにいじめ殺されたという噂の女の幽霊が隣の家のお婆さんの所へ出た、死んでも姉さんが怖かったからだという話。これはそのお婆さんの直話を聞いた筆者の父からの伝聞である。かつて築地に栄えた「とんぼ」という料理屋とそのおかみに関して伝わる死者が次々に親しい人をあの世へつれて行ってしまうという、叔母から聞かされた因縁話。築地河岸の屋台のあま酒屋へ夜毎に子をだいた女が来てはあま酒を子に飲ませていた、ふしぎに思ってあとをつけていくと墓地の中で子の泣き声がするので掘りおこしてみると産婦の死骸のかたわらで赤子が生きて泣いていたという話。更に、タクシー幽霊といういわゆる「都市伝説」といわれた話など。つまり都会のfolklore（民間伝承）によって語りおこされている。

「幽霊」の先祖をたずねていくと、平安朝の「もののけ（物の気・物の怪）」へ遡る。もののけの託宣は「よりまし」が語るのであって、もののけに姿はないが、それが幽霊として姿を現してくる過程には、能から人形浄瑠璃、歌舞伎に至る芸能の橋渡しがあったものと考えられる。

柳田国男に「妖怪談義」（昭和一一・三・一『日本評論』単行本としては昭和三二年）がある。『日本の幽霊』の先蹤となった著作だが、柳田は幽霊を都会の生活者が生み出したものとして民俗学の研究対象として認めていない。能、歌舞伎という芸能も認めず仏教による影響も拒否する

富山民俗の会

〒九三〇―〇八八一
富山市安養坊五六甲の一
富山市民俗資料館内

・会費　年額　四、〇〇〇円
・郵便振替口座　00740-5-12787

印刷／㈱チューエツ